
恋 神 k o i g a m i

音紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋 神 k o i g a m i

【著者名】

N4127D

【作者略】

音紅

【あらすじ】

高校一年生になる茶子【サコ】は恋愛経験無し。そんな状態を脱すべく、思いついた名案とは…

零・プロローグ

『今年高校一年で恋愛経験皆無』って有り得ないと思します？

：大体の高校生は有り得ないんだろーなあ……。

けれど今年高校一年生になる私、桐島 茶子サコは

恋愛経験皆無なのですっ！

友達は恋話コイバナをしているのに、私は全く解らない…そんな寂しい状態から脱出するため、一つの名案みょうあんが浮かんだのです！

その名案っていうのはこんな会話から生まれました…

*

「ねえ茶子知つてた？」

「…え、何？」

親友である原田 花澄カスミに声を掛けられたとき、私はお菓子を片手に雑誌を読んでいた。

それに真剣だつたためそれまでの会話を聞き逃していたのだ。

「つたく茶子はお菓子ばっかり！太るよ！」

「えつ？嫌だつ」

「それは置いといて。…ね、あの森の辺に神社があるの知つてるでしょ？」

少し考えて、返事をする。

「あー…道路外れたとこ？」

確かに私たちの住む町の外れには、木が生い茂つた薄暗い森がある。

「そう。その神社には願いを叶えてくれる力があるらしいよ

私は心底驚く。

「ええ！？あの古ぼけた、今にも崩れそうな神社に？」

「噂だけどね。でも確かめた人はいないんだって。茶子の言つとお

り、今にも崩れそうだから近寄りないの

「ふうん」

「信じてないね」

もう一度お菓子を口に運ぶ。

「だつて、そんなこと急に言われても…。しかもあの神社でしうつ
?ナイナイ」

「…まあ信じないのも無理無いよ。誰も確かめてないんだし
するとその噂話を教えてくれた希美子が言う。

「でもさ、行つてみる価値はあると思うの。私、両想いを頼んでこ
ようかなっ」

「えー危ないよ~つか希美子なら大丈夫でしょ
その言葉が出た途端、私はきょとんとした。
しかもバツチリ花澄に見られてい。

「あははは 茶子には解らなによねー~お子ちやまだか
「ひ、つむといつ

「」

『ひ』で浮かんだのが、名案。

!~』

とこつ物でした。

本氣で信じてこるフケじやなにけど、希美子の声つとおり、お願ひ
する価値はあるかなと思つて。

零：プロローグ（後書き）

この度は『恋 神 k o i n o m i』を読んで下さり有難う御座います。

オリジナルで書くのは久しぶりでドキドキしています。
拙い文章ですが、是非最後までお付き合いで下さい。

誤字脱字がありましたら教えて下され。

一・名案決行

あらすじ＊恋愛経験皆無の茶子は古ぼけた神社の噂を耳にして…

「よしつ…終わった！」

今日の授業は全て終了した。

神社に行く気満々だつた私は、挨拶の後、勢いよくガツツポーズ。

「茶子ー帰ろう？」

花澄に呼ばれた。

「あ、ゴメン。今日は用事があつて…」

不思議そうに首を傾げる花澄。

「そーなの？じゃ、また明日ね

「うん、じゃーねっ」

明るく挨拶を交わすと、私は一度家に戻つた。

暗くなると嫌だつたから、着替えもせずに、鞄だけ置いて神社へ向かう。

*

「……此処、だよね……？」

急に不安に駆られた。

そこはどう考へても神社など無い…薄暗いといふか真つ暗な…森の入り口。

「怖つ…！けど此処で帰つたら意味がないよね」

自分を奮い立たせて森へ入る。

少しの物音にも怯えながら、それでも進むと、赤い鳥居のような物が見えた。

「あ…あつたあ…！」

喜びで飛び跳ねた。

そして近寄つていいく。

「…どうか、私に恋をさせて下さーっ」

パンパンッと手を打つが、何も起きない。

「あ、そつか。すぐに叶つワケじやないよね。神社だし」と言つて家に帰ろうと足を向けた。

すると。

「オイ」

背後で、明らかに女の人の声でない声が聞こえた。

「え、氣のせい氣のせい…」

自己暗示をかけながら立ち去るつとする私に向かつてもう一度。

「待てよ、オイ」

私は耳を塞ぎ、歩いて森を降りていいく。

もうすぐ とこうとこうで木の根に躊躇ついた。

「ほわああああつーっ」

「ー。」

ガツ

何かが滑り込むような音がした。

恐る恐る口を開ける。

「あれ、痛くない…」

「つてえ…」

「 ツー？」

一：名案決行（後書き）

此処まで読んでいただき、有難う御座います。

これは多分、前のお話より長くなると思っております。

一話ずつ少しでも成長していくように頑張りますね^_^

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

一・衝撃が駆けた

あらすじ＊名案が浮かんだその日、早速神社へ行つた茶子だが…

私はその状況に絶句する。

体が痛くなかったのは、別の人気が下敷きになつていたからだつた。しかも、見たことの無いような、綺麗な顔立ちの男の人…。

「痛えんですが…早く退いて下さい」

「あ、す、すいません」

瞬時に起き上がると、もう一度彼の容姿に見入る。

サラサラの黒髪、赤い瞳、白い肌。

その円らな瞳には間違ひなく私が映つてゐる。

「何見てるんです」

「いつ…いえ！何でもありません」

しかし、それにしても…。

変わつた格好だな、と思つた。

和服。派手な物でない、落ち着いた色合いの。

何故この季節に、このご時世にそんな格好をしている？

それに。

「あの…どうして此処にいるんですか？」

それさえ解らない。

すれ違つた人なんていなかつたし、同じ高校生なら近くに高校は茶子の学校しかない。

なら行くときに一緒になるか、見掛けるかするはずなのだ。

「だつて、呼んだのはアンタでしょう」

「へ？呼んだ…？」

「ついさつきのことを憶えてもないんですか。…」「りやハズレだ

な」

「は、ハズレつて何ですか！初対面の人にハズレだなんて、失礼じ

や
な
い
で
す
か
！

しん…と静まりかえる。

「アンタわつとき、願い事をしたでしょ？」

「え？願い事…」

先程の、神社でのことだろ？

「はい…しました、けど

「俺はアンタの願いを叶えるために来たんです」

思考を整理する。

しばらくの沈黙、そして。

「ええええつ！？神様あ！？」

「神なんてすげえもんじゃねえですけどね。アンタに呼ばれちまつた以上、叶うまで一緒にいたせてもらいます」

「叶うまで…」

口も態度も悪いけど、願いが叶えてもらえるなら。

そう思つた私は、意を決して頭を下げた。

「宜しくお願ひします！」

一・衝撃が駆けた（後書き）

此処まで読んで下さり、有難う御座います。
関係ないですが私は敬語の遣える男性が好きです（笑
格好良くないですか？

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

II・トキメク、ハハロ。

あらすじ* 神社にお願いをし終えた茶子の田の前に現れたのは『神様』だった…？

「…アンタ、名前は」

上から田線で訊いてくるその男は、外見年齢16、7といつ感じだつた。

同学年…いや、学校で見たことはない。

また彼の顔をじっと見つめて答えない茶子に、男はもう一度訊いた。
「聞いてます？ 名前はなんて言つんですか」

やつと我に返る茶子。

「はいっ！ き、桐島茶子つてぃいます！」

満足げに口の形を歪める。

「サコですか。俺の名は斎^{イツキ}。宜しくお願ひしますね、茶子」
非の打ち所がない微笑みに、茶子は完全ノックアウト。

逆上せた感覚になり、ふらりと後ろへ傾ぐ。

「お、おいつ」

がくん と衝撃が走り、やつと田を開けると、斎が手を掴んでいた。

「何度も転びになつたら気が済むんですか。もつもつとみたいに
痛え思ひはしたくなえ」

「あ…す、すいません」

よたよたと体制を立て直し、歩き始める。

所々剥き出しになつた木の根に躊躇、ぬかるんだ地面に足を滑らせ
る。

その度に斎に助けてもらつ始末だ。

顔が相当火照つていい。

熱に浮かされてくるようだ。

「つたくよ……」

斎がそう溜め息混じりに言つて、ぐこと茶子の手を引ひ張る。

「え……？」

「裾掴んで下せ。危なつかしくて見てられねや」

「ありがとひ……」

茶子の心臓が跳ねている。

とくん、とくん それは顔の火照りと比例しているようだつた。
この気持ちが何なのか、茶子にはまだ解らない。

三・トキメク、ハハロ。 (後書き)

読んで下さって有難う御座います。

もつと楽しんで書けたらな、と思つてこの今田の頃。

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

四：「都合主義多いに結構！」

あらすじ＊呼び出した彼は斎。本当に恋をさせてくれるのか…

斎は茶子が立ち止まつた正面にある家を見上げ、「へえ。結構でかいじゃねえですか」と感想を述べる。

「…お母さんに何て言えば良いんだろ。急に男の子連れてきたら驚くだろ」

茶子の家には母しかいない。

父は単身赴任で海外だ。

独り言のように彼女が言つたのを聞いた斎は、当たり前とも言つよつと伝える。

「ああ、それなら心配^い無用ですよ。茶子のお母さんことって俺は、暫く預かることになつた知り合いの息子つてことになつてるんで」「え、そんな^い都合主義なの？」

「この手の話は大体そーなつてるでしょう?漫画とか読んだことねえんですか?」

「あるけど。あ、でもそーゆつ話つて多いかも」「納得できました」

決めつけた言い方をして、先に家に入る。

「只今戻りましたー」

「ただいま」

茶子もそれに続いて帰りを知らせた。

「お帰り。寒くなかった?」

キツチンから母親の和子^{ワコ}が顔を出す。

「うん、制服だったから」

斎が茶子に耳打ちをする。

「とにかく、お母さんの名前は何ていうんですか？」

「…知らずに知り合いの息子演じる気だつたの？」

「細けえ」ことは気にするもんじゃねえですよ。で？」

「和子だよ」

「ワタさんですか」

会話が終わつたところで、タイミング良く母が話し掛ける。

「斎くんは？こっちにはもう慣れた？」

「はい、すゞく良いところで嬉しいです。一生暮らしたいくらいですよ」

彼の完璧な笑顔が、母の胸を打ち抜く。

その隣にいる茶子は、半ば呆れたような目で斎を見た。

「あらあ、それは良かつたわ そーだ、茶子、お風呂沸いてるわよ。
入つたら?」

「うん」

言われるがままに、風呂へと向かう茶子。

その背中を見送りながら、母は微笑んだ。

「…ふふ。斎くんが茶子を落してくれれば良いんだけどね」

「えつ … 和子さん？」

聞き間違いだろうか？

けれど今、確かに。

「あら?でもそーなつたら、一生此処で暮らせるかも知れないわ
なんちゃって」

そう言つと、母は微笑みながらバスルームへ、タオルを持って行つた。

四・いじ都合主義多いに結構！（後書き）

読んで下さり有難う御座います。

更新が少し（？）遅れました。

すいません。

：個人的にお母さんと姫くんが書くの楽しいです。

五・嵐の予感

あらすじ＊ 茶子の家では斎が知り合ひの息子と「う設定になつて」いるらしい…？

彼女は自分の部屋にいた。

ジャージに着替え、濡れた短い髪を束ねている。

「…神様、かあ…」

「呼びました？」

突然聞こえた声に驚き、瞬時に振り向くと、背後に斎がいた。
「はあああつ！な、なな何でいるの？」

「いや、呼ばれた氣がしたもんで」

「ノックしてよつ、ノック！」

「ああスマセソ（棒読み）」

「謝る氣ゼロなワケッ？」

「ありますよ。…見えないくらい小さいけど」

「今、とっても言わなくて良いこと言つたね」

「…お母さんが呼んでます。夕飯だそーですよ」

茶子は「解つた」と言いながら立ち上がり、部屋を出た。

夕食を食べ終え、斎が風呂へ向かつた。

「お母さん、斎くんの両親つて何処にいるの？」

「あれ、何処だつたかしら」

（超適当おおつ）

愕然としていると、母は思い出したように口を開く。

「そーいえばね」

本棚から、薄い本のような色紙のような物を持ってくる。

「茶子にお見合いの話が来てるの」

開いて見せたそこには、綺麗な顔立ちの、同じ年くらいの男が映っている。

「へえ、そーなんだ つてえええつー!？」

「なんかね、お父さんが茶子のこと心配しちゃって」

「心配の仕方間違つてないの、これ?」

「間違つてないわ。愛情表現つて色々種類があるモノよ」

「…」

絶句。

母が「ホンと咳払いをすると、相手について話し始めた。

「相手の方はね、吉池グループの御曹司で、吉池俊彦さん。歳は茶子と同じ。顔も芸能人レベルでしょう。斎くんほどではないけど」

「う、うん…」

「しかもね、恋愛未経験の茶子にはとても良いお知らせ

「?」

茶子の頭上にクエスチョンマークが出たとき。

「吉池さんは茶子に一目惚れらしいの きやつ

「はあ つー?」

「写真を見てね」

「いつ撮ったのー? そんな写真つ

「こーゆうキチンとした物じゃなくてね、家族写真的な、修学旅行の集合写真的な?」

「なんで見せるの、そんな物つ

「だつて、どうしてもって言われたら見せるしかないでしょ?..」

拳を固める。

「つてゆーかつ!私はお見合いなんてしないよ?」

「えー?じゃ斎くんと、こっちの人とどっちが良いの?」

「へッ……?」

「上がりましたー」

丁度良く、斎が着替えて戻ってきた。

「何の話ですか?」

「これなんだけどね……」

「私はつ」

「顔が熱い。」

何でそんなことを言つだけで緊張するのだろつ。
解らない……けど、言わなければ。

「……斎の方が良い……」

「？」

「やっぱり? じゃあ斎くんに任せちゃおーっと 茶子を貰っくわ、

「斎くん」

「へ、あ、ハイ」

五・嵐の予感（後書き）

遅くなりました（汗

読んで下さって有難う御座います。

急展開…出来ればいいなと思つてます（え

誤字脱字がありましたらお知らせ下さい。

六：『相手は誰でも良いわけじゃない』

あらすじ＊なんと茶子にお見合いの話が来ているらしい…？

*

お母さんも寝付き、私は斎の部屋へ行った。

斎が訊いてきた、先程の話の説明をするためだ。

「へー、そーゆー話だつたんですか」

あくまで軽く言ってくる斎に、私はげんなりする。

「斎にはその程度の話かも知れないけど…お見合いかあ。何か、嫌だ」

温かいココアを飲みながら、斎はきょとんとした表情で見てきた。
「嫌？恋がしたかったんじゃねえんですか？」

「んん…。そーなんだけど」「

どうも、胸に引っかかる物がある。

「何にせよ、俺あアンタの願いを叶えに来たんだし、恋してもらわ
ねえと」

「ははは…」

迷惑なんだろうな。

私が同じ立場なら、せつと願いを叶えて、帰りたいと思うもん。
斎の整つた横顔を見た。

すると、急に真顔になつて私を見る。

「…相手は」

「え？」

「相手は、誰でも良いんですか

？」

「え…？」

ガタンンッ！

「へつ……？」

一瞬にして押し倒されている。

ふわりと斎の香りが、私を包んだ。

「な……なに？ 斎？」

状況に気づいてから心臓の音が大きく感じる。
斎にきこえてなきや良いけど。

そう思つたとき、彼が微笑した。

「ははっ……心臓の音、此処まできこえる」「！」

「意識することねえでしよう。相手は誰でも良いわけじゃねえんだ
から」

とか言いながら、思い切り意識させたいらしく、耳元で囁つてくる。
「意識することねえって……耳元で囁つてんじやんかっ！」

「……ドキドキ、します？」

私の手を取つた。

身動きが全く取れない。

「はッ……離してよおッ……」

「離しません」

「なんでそんな……んんっ！？」

唇に柔らかい物が触れた。

「んん……ッ！」

同時に、私のモノでない鼓動が唇から伝わる。

「ふあっ……やめ……ん……」

十秒ほど重ねていたかも知れない。

やつと唇が離れると、斎の顔がよく見れた。

「斎……顔、真っ赤……？」

「……」

「まさか斎……私に、ドキドキしたの……？」

六：『相手は誰でも良いわけじゃない』（後書き）

大分間が空いてしまいました。すいません。
読んで下さっている方々、本当に有難う御座います。
まだまだ続く予定ですので、宜しくお願いします。

七・溢れる想い

* あらすじ 茶子にキスをした斎は…

斎は答えてくれなかつた。

一瞬だけ見えた、哀しげな顔が日に焼き付く。
確かに頬は赤かつたのに、瞳は哀しそうだつた。

「……すいませんでした。もう寝ます」

感情の籠もつていないうを残し、彼は部屋を出た。

「斎…？」

翌日、母は電話を掛けっていた。

「あ、もしもし? はい、お見合いの件なんですか?」

私はほつとしていた。

断るための電話だと雰囲気で解つたからだ。

「はい、茶子にはお見合いなんてまだ…え?えつ…こつ決まつたんです?」

後半に入り、その空気は一転した。

母が焦つてゐる。

「そんなん…会つただけでもつて…ええ、はい…解りました、言つてみます」

受話器を充電器に置いた。

「…お母さん?」

制服のリボンを結びながら、俯く母を呼ぶ。

「茶子、お見合い…決まつちゃつたみたい」

「え、何でつ?」

「解らないの。知らないうちに全部、口取りまで決めてあつて…」

「会つだけでも良いつて言われたけど…どうする? 嫌なら嫌で良い

申し訳なさそうに首を振つた。

のよ？」

少し考え、頷いた。

「良いよ。会うだけで良いんでしょ？行きます。美味しい料理、食べれるの？」

予想外とでも言いたそうな顔をして、母は答えた。

「つ、うん…イタリアンらしいけど」

「やつたー 楽しみつ」

「じゃ、明日の放課後、迎えに行くわ」

平然としてみせたけど、実際は混乱していた。
何でお見合いの話は決定したんだろう？

お母さんに覚えがないとしたら、他に誰が　？

「…斎」

帰宅途中、私は立ち止まつた。
隣を歩いていた斎は、後ろを振り返る。

「どーしました？」

「…お見合いの話…」

思わず彼から目を逸らす。

「斎が言つたんでしょう…？」

「！」

「そんなに迷惑だった？私…そんなに早く帰りたかった？」

「…」

斎は少しも動かさずに、ただ私の問いかけを聞いていた。

「ねえっ…私、斎のこと縛つてた…つー？」

自然と涙が溢れる。

彼の答えを待つだけで、こんなに胸が締め付けられる。

何なんだろう？この気持ちは……？

「いつきつ…！…！」

気づくと、私は斎の腕の中にいた。

暖かい体温は本当の人のようだった。

七：溢れる想い（後書き）

遅くなりました！

恋神もラストスパートです。

最後までお付き合い下さいませっ。

八：消えゆく貴方

あらすじ＊ 斎に問いかける茶子。涙した彼女を斎は…？

「…『めん』」

「謝つてほしくなんか…ないの。私は斎に答えてほしいだけ…」
「俺は、帰りたいはずでした。けど…茶子がお見合いをするって聞いたとき、意味の解らない感情が溢れて、俺は俺を保つていて…ことができなくなっていました」

抱きしめている両腕に力が籠もる。

「これ以上側にいたら、茶子が別の男ヤツと結ばれない限り…諦めることができなくなる。そんなの、迷惑以外の何物でもねえ」

耳元で紡がれる素直な言葉。

聞いているだけで切なくなる。

「だから、俺の気持ちがバレねえうちに帰ろうと思つてたんです。
…でも駄目でした」

「…斎」

「俺はもう帰れません。帰りたくねえんです」

「…どうして？」

「…茶子のことが、好きなんです」

全身の力が抜けていくような感じがした。

「わっ…私…私も…」

今実感した。

私は間違いなく、斎のことが好きなんだ。

すると同時に、彼の体が透き通った。

「…？」

驚く私。

ふふ、と寂しそうに笑う斎の顔は、綺麗だった。

「茶子の願いは『恋をしたい』だつたでしょ？だから、もう願いは叶つたんですよ」

「だから、だから消えちゃうの…？そんなのいやだつ！そんなの…好きになつた意味ないじゃないつ！」

「…最後くらい、我が放させて下せー！」

もつ一度私を抱き寄せた。

優しく、消えかけていたけれど、確かに暖かく。

「ごめん…」

一方的にキスをして、空へ舞つた。

八：消えゆく貴方（後書き）

お付き合いいただきありがとうございました。
次回で最終話となります。

最後まで見届けてもらえれば幸いです^ ^

あらすじ＊ 空へと消えた斎を想つ茶子は…

「斎..泣いてたの？」

手の甲に落ちた雪を見て、茶子は呟いた。

「「」あん…「」めんね…」

*

次の日の朝、茶子は制服に着替えて神社へ向かった。

「なに、「」の音…？」

近づくほど大きくなる機械音。

嫌な予感が実現された。

「…！」

斎のいた神社は取り壊されていたのだ。

「なつ…どーして壊してるんですか！？」

ヘルメットを被った男に訊く。

すると彼は、茶子の頭をポンと撫でて言つた。

「此処はなあ、もともと壊れそうで危なかつたんだよ。誰か下敷きになつたら大変だから、撤去しようつてことになつたんだ」

「そんな…」

家の前まで戻ると、がくん、としゃがみ込んだ。

絶望が茶子を包む。

「斎..もう会えないの、解つてキスしたの…？ずるいよ、そんなの…馬鹿あ…」

「何言つてるんですけど？」

突然背後から聞こえた声に驚いて振り向く。

そこには。

「…斎？」

幻だと思った。

けれど彼が、茶子と田線をあわせるためにしゃがみ込み、頬を撫でて気づく。

「何でいるの…？」

「いや悪いんですか？」

相変わらずの憎まれ口。

茶子はそんなことお構いなしに抱きついた。

「うおっ！？」

「バカッ…馬鹿あ…私、お見合いなんてしないからね…」

斎はそつと彼女の頭を撫でた。

「撤去つて言われても、神社ごと潰されるなんてごめんでしょう。だから慌てて引っ越してたんですね」

「…何処に」

「そりゃあ勿論」

斎が見上げた。

つられて茶子も見上げる。

「『ウチ』にですよ」

数年後。『吉池グループ、社長独身のまま海外へ進出!』といふ記事が載った新聞の横。

飾られた写真の茶子の隣には、確かに“彼”が微笑んでいた。

最終話・隣（後書き）

最後までお付き合っていただき、本当にありがとうございました。
読みにくい部分もあつたかと思います。
次の作品ではもっと上達したいと思つておつまますので、どうぞ宜しくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4127d/>

恋 神 k o i g a m i

2010年10月11日14時27分発行